復活節第三主日（Ａ年）のみことばの典礼の解説

主題：復活したイエスに出会った弟子たち

第三主日のみことばの典礼は復活したイエスとの出会いがテーマです。今日の典礼は、弟子たちが出会ったように、典礼に与るすべての者が復活したイエスに出会うよう招いています。

第一朗読　使徒言行録　2 章 14、22～33 節　イエスが死に支配されたままでおられるなどということは、ありえなかった

02:14 すると、ペトロは十一人と共に立って、声を張り上げ、話し始めた。「ユダヤの方々、またエルサレムに住むすべての人たち、知っていただきたいことがあります。わたしの言葉に耳を傾けてください。02:22 イスラエルの人たち、これから話すことを聞いてください。ナザレの人イエスこそ、神から遣わされた方です。神は、イエスを通してあなたがたの間で行われた奇跡と、不思議な業と、しるしとによって、そのことをあなたがたに証明なさいました。あなたがた自身が既に知っているとおりです。02:23 このイエスを神は、お定めになった計画により、あらかじめご存じのうえで、あなたがたに引き渡されたのですが、あなたがたは律法を知らない者たちの手を借りて、十字架につけて殺してしまったのです。02:24 しかし、神はこのイエスを死の苦しみから解放して、復活させられました。イエスが死に支配されたままでおられるなどということは、ありえなかったからです。02:25 ダビデは、イエスについてこう言っています。『わたしは、いつも目の前に主を見ていた。主がわたしの右におられるので、わたしは決して動揺しない。02:26 だから、わたしの心は楽しみ、舌は喜びたたえる。体も希望のうちに生きるであろう。02:27 あなたは、わたしの魂を陰府に捨てておかず、あなたの聖なる者を朽ち果てるままにしておかれない。02:28 あなたは、命に至る道をわたしに示し、御前にいるわたしを喜びで満たしてくださる。』02:29 兄弟たち、先祖ダビデについては、彼は死んで葬られ、その墓は今でもわたしたちのところにあると、はっきり言えます。02:30 ダビデは預言者だったので、彼から生まれる子孫の一人をその王座に着かせると、神がはっきり誓ってくださったことを知っていました。02:31 そして、キリストの復活について前もって知り、『彼は陰府に捨てておかれず、その体は朽ち果てることがない』と語りました。02:32 神はこのイエスを復活させられたのです。わたしたちは皆、そのことの証人です。02:33 それで、イエスは神の右に上げられ、約束された聖霊を御父から受けて注いでくださいました。あなたがたは、今このことを見聞きしているのです。

【解説】この箇所は、聖霊が降った後、使徒ペトロがユダヤ人に向けて語った長い説教(2:12-42)の一部。使徒言行録には、多くの説教・演説があり(全、約 1000 節中、300 節がそれ)、物語が大きく展開するときに、説教がある。聖霊降臨直後のペトロの長い説教は非常に長く、多くの内容を含んでいるが、ここに、初代教会の最初のケリュグマ(最

初の告げられた(宣教された)内容)が描かれていることが重要。今日読まれる部分(22-33 節)の大事なポイントとしては、まず、イエスの生涯、特に死と復活が、旧約の歴史から始まる神の救の計画の中で実現したという説明、ペトロはそれを、詩編 16 を引用しながらユダヤの民がメシアについてよく理解できるよう語っている。反対からいうと、イエスの復活の出来事をとおして詩編を再読し、このダビデの言葉が実現したと説いているわけで、まさに、新約の光から旧約を理解した弟子たちの理解が輝く場所の一つになっている。そこには初代教会の土台を気付いた使徒の権威もあり、それに基づく旧約理解をとおしてイエスの復活の証明がなされているのである。

第二朗読　ペトロの手紙Ⅰ　1 章 17～21 節　あなたがたが贖われたのは、汚れのない小羊のようなキリストの尊い血による

01:17 また、あなたがたは、人それぞれの行いに応じて公平に裁かれる方を、「父」と呼びかけているのですから、この地上に仮住まいする間、その方を畏れて生活すべきです。01:18 知ってのとおり、あなたがたが先祖伝来のむなしい生活から贖われたのは、金や銀のような朽ち果てるものにはよらず、01:19 きずや汚れのない小羊のようなキリストの尊い血によるのです。01:20 キリストは、天地創造の前からあらかじめ知られていましたが、この終わりの時代に、あなたがたのために現れてくださいました。01:21 あなたがたは、キリストを死者の中から復活させて栄光をお与えになった神を、キリストによって信じています。従って、あなたがたの信仰と希望とは神にかかっているのです。

【解説】先週に引き続き、第一のペトロの手紙からの朗読で、先述したとおり、これは初代教会の洗礼式の説教がもとになったと言われている。加えて頭に置いて読むとよいことは、この手紙の読者たちの時代背景にキリスト教に対する迫害があること。今日の箇所では、初代教会が直面してきた異教(特にユダヤ教)側からの誹謗や訴訟などの迫害が想定されている。ペトロは、ここで神を「父」と呼べるようになった受洗者を励ます。“贖い”とは、もともと奴隷や捕虜を解放するために代価を払うことであったが、神は、人を罪とその罰から贖うために、朽ち果てる金銀を用いたのではなく、「キリストの尊い血」によって贖ってくださった。そこまでしてくださった神を畏れ敬って生活することは、復活したキリストと共に栄光のうちに生きるようになるという救いの実現のためであり、これこそが私たちの最終的ゴールであることをペトロは力説する。それは“仮住まい”と訳されている原文ギリシャ語の παροικία：paroikia【para(横に、脇に、側に) + oikia(住まい、家)】が意味する“本拠地を離れ他郷の住民の横での生活”がよく表している。つまり、私たちはこの世では仮住まいの者で、キリスト者の本拠地は天の国であり、そこで復活したキリスト共に生きるようになることが最終目標であるというのである。

ちなみに、παροικία：paroikia は、羅:parochia、英:parish、伊:parrocchia、西:parroquia、仏:paroisse、と訳されており、日本語訳の“小教区”は、“教区の小さなもの”という統制上の機能的な部分しか強調されておらず、天の国に繋がっている仮住まいの場所としてのニュアンスは全く消えてしまっている。

福音　ルカ 24 章 13～35 節　パンを裂くと、彼らはイエスだと分かった

24:13 ちょうどこの日、二人の弟子が、エルサレムから六十スタディオン離れたエマオという村へ向かって歩きながら、24:14 この一切の出来事について話し合っていた。24:15 話し合い論じ合っていると、イエス御自身が近づいて来て、一緒に歩き始められた。24:16 しかし、二人の目は遮られていて、イエスだとは分からなかった。24:17 イエスは、「歩きながら、やり取りしているその話は何のことですか」と言われた。二人は暗い顔をして立ち止まった。24:18 その一人のクレオパという人が答えた。「エルサレムに滞在していながら、この数日そこで起こったことを、あなただけはご存じなかったのですか。」24:19 イエスが、「どんなことですか」と言われると、二人は言った。「ナザレのイエスのことです。この方は、神と民全体の前で、行いにも言葉にも力のある預言者でした。24:20 それなのに、わたしたちの祭司長たちや議員たちは、死刑にするため引き渡して、十字架につけてしまったのです。24:21 わたしたちは、あの方こそイスラエルを解放してくださると望みをかけていました。しかも、そのことがあってから、もう今日で三日目になります。24:22 ところが、仲間の婦人たちがわたしたちを驚かせました。婦人たちは朝早く墓へ行きましたが、24:23 遺体を見つけずに戻って来ました。そして、天使たちが現れ、『**イエスは生きておられる**』と告げたと言うのです。24:24 仲間の者が何人か墓へ行ってみたのですが、婦人たちが言ったとおりで、あの方は見当たりませんでした。」24:25 そこで、イエスは言われた。「ああ、物分かりが悪く、心が鈍く預言者たちの言ったことすべてを信じられない者たち、24:26 メシアはこういう苦しみを受けて、栄光に入るはずだったのではないか。」24:27 そして、モーセとすべての預言者から始めて、聖書全体にわたり、御自分について書かれていることを説明された。24:28 一行は目指す村に近づいたが、イエスはなおも先へ行こうとされる様子だった。24:29 二人が、「一緒にお泊まりください。そろそろ夕方になりますし、もう日も傾いていますから」と言って、無理に引き止めたので、イエスは共に泊まるため家に入られた。24:30 一緒に食事の席に着いたとき、イエスはパンを取り、賛美の祈りを唱え、パンを裂いてお渡しになった。24:31 すると、二人の目が開け、イエスだと分かったが、その姿は見えなくなった。24:32 二人は、「道で話しておられるとき、また聖書を説明してくださったとき、わたしたちの心は燃えていたではないか」と語り合った。24:33 そして、時を移さず出発して、エルサレムに戻ってみると、十一人とその仲間が集まって、24:34 本当に主は復活して、シモンに現れたと言っていた。24:35 二人も、道で起こったことや、パンを裂いてくださったときにイエスだと分かった次第を話した。

【解説】ルカ福音書には復活後のイエス出現の話は 2 つ(24:13-35、24:36-49)あり、その一つ目が今日の「エマオの弟子たち」の話で、ルカの復活思想の中枢をなす。

<u>１．全体的な構造</u>：

「エマオの弟子たち」の話は、<u>23 節の「イエスは生きておられる」</u>が中心になっている。これを中心に、その前と後の各部が対応していることが特徴である。上のカラフルな本文は、できるだけキアズム(交錯法)[1]の構造がわかるように配慮してある。キアズ

[1] Chiasmus(キアズム、交差法)：**セム系諸語、ギリシャ語、ラテン語の文学に用いられた文学的手法。**二つ、もしくはそれ以上の要素の連続ののちに、逆の順序でそれに対応する要素が続く文体に関する文学的手法」。例えばローマ人への手紙 10:9-10 に明確なキアズムが使用されている。(次ページ注に図)

ムとは一つの中心(この箇所では 23 節)の前後の各部分が対応する形(同じ色が対応)にする文学的技法のひとつで聖書にはよく用いられている。

２．主題とポイント

「エマオの弟子」の内容そのものは比較的有名であるが、これがルカ的なミサ聖祭(当時は「パンを割く式」と呼ばれた)の説明であるのは、あまり知られていないかもしれない。簡潔に言うと、ミサ聖祭は“みことばの典礼(第一朗読～説教)”と“感謝の典礼(奉納～拝領)”の二部構成になっているが、「エマオの弟子」の話では、前半部分で復活したイエスが弟子たちと共に歩みながら、聖書全体にわたり、御自分について書かれていることを説明し(27 節)、後半部分で一緒に食事の席に着き、パンを取り、賛美の祈りを唱え、パンを裂いてお渡しになった(29，30 節)。すると、二人の目が開け、イエスだと分かった(31 節)。ルカはこのように、ミサの構造と重ねて、弟子たちの復活したイエスとの出会い、歩み、そして、復活したイエスだという理解のプロセスを語っているのである。読者に向けた主題(メッセージ)として解しうるのは、復活したイエスとの出会いやイエスを知るという恵みは、ミサ聖祭をとおしてである。ルカ福音書の成立年代とされる紀元後 70～80 年代のキリスト者は、イエス自身を見たことのない人々であるから、ルカは、復活して生きておられるイエスと出会い、知り、触れ、イエスと共に生きれるようになるのは、実にミサ聖祭をとおしてだと訴えたかったのであろう。

また、ルカ福音書全体から見た時、「エマオの弟子たち」の話は集大成的な役割を果たす。二人の弟子がイエスとともに歩いているのに、彼らの目は遮られていて、イエスだとは分からなかったのは、まさに、イエスと共に十字架に向かっているのに何もわからなかった弟子たちのことである。実際、宣教生活の特に後半部分(ガリラヤからエルサレムに向かう旅)では、彼らはイエスの行いや言葉の意味が分かっておらず、一つひとつが受難や死に結ばれていたことや、その真の意味がわかっていなかった(例ルカ 9:44、18:34)。エマオの弟子の話の前半部分(13-24 節)で起こる二人の弟子の無理解がこれであるが、彼らの目が開けてイエスが見えるようになる(31，35 節)のは復活者キリスト自身の説明によってのみ可能だということが後半部分(25-35 節)で示されている。

このように、「目が遮られている」状態から「見えるようになりイエスだとわかる」ことがとても大事なことであるが、それは私たち人間の努力の実りというよりも、イエスご自身のアプローチ、説明、そして何より自ら割いてくださる(御)体をとおしてである。このルカの論点は、ミサ聖祭における私たちのイエスとの出会いを強く促している。みことばイエスとご聖体のイエスに養われながら、復活したイエスを知り、イエスとともに歩いていきたい。

A　自分の口で、イエスは主であると告白し、
　B　自分の心で・・・信じるなら
　　C　あなたは救われる。(中心)
　B’　なぜなら、　人は心で信じて義とされ、
A’　口で告白して救われるからである。